

米中貿易摩擦のなかのタイ貿易： 対中国・日本・アメリカ貿易の分析を中心に

宮島 良明

Thailand's Trade Amid U.S.–China Trade Tensions:
An Analysis Centered on Its Trade with China, Japan, and the United State

Yoshiaki MIYAJIMA

はじめに

現在、世界経済は壮大な「社会科学的な実験」のなかにあると言えそうだ。本来、社会科学の分野では実験が不可能な場合がほとんどであるが、世界最大の経済規模、貿易額の国が突如広範囲に大幅な関税引き上げを行うことが、世界経済、そしてアメリカ経済自体にどのような結果をもたらすのか、誰にも分からないからである。もちろん、大国の一方的な相互関税の設定は、経済的側面だけではなく、外交や国際政治的な側面にも大きな影響があるだろう。その意味では、この実験は、より複雑な経路をたどり最終的な結果にたどり着くものと想像できる。

2期目の大統領就任後の4月2日、アメリカのトランプ大統領は、「公約」どおり「相互関税による輸入制限により、米国の巨額かつ恒常的な貿易赤字に寄与する貿易慣行を是正する」と題する大統領令を発表した¹。相互関税は57か国・地域ごとにそれぞれ設定されたが、日本が24%、中国が34%であるのに対し、タイが36%、インドネシアが32%、マレーシアが24%、フィリピンが17%、カンボジアが49%、ラオスが48%、ミャンマーが44%、ベトナムが46%、ブルネイが24%と、ASEAN諸国に相対的に高い税率が課された。

この関税率がどのように計算されたのかに関しては、貿易障壁の高低差であるとアメリカ政府は説明するが、ここには非関税障壁も考慮されているとのことで、計算結果は相互関税の対象国にとって決して納得のいくもの

とは限らない²。とはいえ、アメリカがASEAN諸国の貿易にとって、もっとも重要な「顧客」であることも事実であり、各国はなんらかの対応を迫られる。

振り返れば、トランプ大統領の関税の引き上げ政策は1期目の2018年に始まった。当初は、中国との間で追加関税と報復関税の応酬が行われた³。この米中の貿易摩擦は、ASEAN諸国にも少なからず影響があったと考えられる。とくに近年、カンボジアやベトナムの貿易は新しい局面を迎えつつあることが私たちの研究から明らかになっている⁴。

これらを念頭に、本稿ではかつてASEAN経済をリードしたタイに焦点をあて、その貿易構造が米中貿易摩擦、およびアメリカの相互関税のなかにあって、どのように変化しているのかを考察する。第1節では、2000年代以降のタイ貿易の輸出入額の推移と、輸出入品目の変化について検討を行う。第2節では、タイの主要貿易相手国について確認をする。ここでは、とくに対中国、対日本、対アメリカ貿易の推移に注目する。そして、第3節では、タイの中国、日本、アメリカとの貿易構造の変化について分析を行う。

本稿の貿易に関する分析については、UNCTADstatのSITC3桁分類の貿易データを用いて行う。その際、すべての貿易データは各国（「世界」を含む）の輸入データを使用する。具体的には、相手国側の輸入額を分析対象国の輸出額と読み替えて分析を行う。これは、各国の関税徴収や国境管理を考慮した場合、輸入データが、輸出データより正確性や信頼性の観点で優れているものと判断さ

¹ JETRO「トランプ米大統領、世界共通関税と相互関税課す大統領令を発表」『ビジネス短信』2025年4月3日。

² 木村（2025）100-102頁。

³ 詳細は宮島（2024）を参照。

⁴ 詳細は大泉・宮島（2022）を参照

れるためであり、より現実に即した貿易実態を把握するための研究上の工夫でもある。

なお、本稿の調査研究については、科学研究費助成事業・基盤研究(C)（(一般)「米中貿易摩擦のベトナムおよびタイの貿易に対する影響に関する比較分析」(24K15462、2024年～2026年、代表者：宮島良明)）の助成を受けて行われたことを申し添える。

第1節 タイの貿易額と貿易品目

1. タイの輸出入額の推移

2000年代以降、タイの貿易は概ね順調に増加してきた。そのことを確認するため、第1図には、1995年から2024年までのタイの貿易額の推移を示した。2000年に771億ドルだった輸出額は、その後、2005年に1281億ドル、2015年に2408億ドル、直近の2024年には3554億ドルと四半世紀で4.6倍以上となった。同様に輸入額も2000年の619億ドルから2005年に1182億ドル、2015年に2026億ドル、2024年には3076億ドルへと5倍に増加した。貿易収支は、変動はあるものの2000年代以降、黒字傾向を示している⁵。

ただし、タイの貿易はこの間、必ずしも均一のペースで増加してきたわけではない。2000年代のハイペースと比較すると、2010年代には増加のペースは落ちた。そして、コロナ後の2020年には、再び増加ペースを取り戻しつつあるように見える。タイの輸出額の年平均増加率を見ると、2000年から2010年の10年間は10.8%、2010年から2020年の10年間は2.3%、2020年から2024年の4年間は7.2%となり、とくに2010年代の低調な推移が目立つ。もちろん、2020年のデータは世界的にコロナの影響が広がった年のものであるため、それも考慮しなければならないが、2010年代には、リーマンショック後の世界経済全体の減速や、タイの国内政治の混乱、大規模な洪水、そして、パソコンの記憶装置のHDDからSSDへの変化など、いずれもタイの輸出産業には向かい風となるようなイベントも多く、これがタイの輸出の減速に影響したものと考えられる。

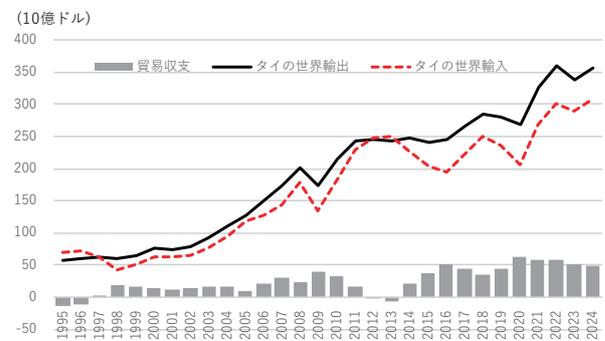
2. タイの輸出入品目の変化

このような推移のなかにあって、タイの輸出入品目がどのように変化してきたのか、確認しておこう。第1表は、

⁵ 本稿では、タイの世界輸出の額を「世界のタイ輸入」の額で代替しているため、タイ政府などが発表している公式統計とは、収支の額に若干のずれが生じている場合がある。

1995年から2024年のタイの総輸出入のうち、金額が多い上位10品目を輸出と輸入それぞれ10年ごとに整理したものである。

1995年のタイの輸出の第1位の品目は「752 自動データ処理機械」で、その輸出額は48億ドル、総輸出に占めるシェアは8.4%であった。第2位の「熱電子管・半導体」や第3位の「事務用機器の部分品」、第7位の「764 通信機器」を含め、このときすでにタイの輸出品目の上位は、IT関連製品を含む電子機器であったことがわかる。一方で、第4位の「036 甲殻類・軟体動物」や第5位の「231 天然ゴム」、第6位の「042 米」、第8位の「037 魚・甲殻類の調製品」、第10位の「061 砂糖・はちみつ」など、農水産品やその加工品が上位にランクされているのも当時のタイ輸出の特徴であった。



(資料) UNCTADstat から作成。

第1図 タイの輸出入額と貿易収支の推移
(1995年～2024年)

2000年代以降も「752 自動データ処理機械」の第1位は継続し、その輸出額も大きく増加した。2024年の輸出額は296億ドルとなり、1995年と比較すると6.1倍に増加したこととなる。同様に第2位が続いた「776 熱電子管・半導体」も2024年にはその輸出額が284億ドルとなり、8.4倍の増加となった。これら2品目が2000年代以降のタイの輸出をけん引したことがわかる。

さらに2000年代に入ると、自動車関連の品目が上位にランクされるようになったことも、タイ輸出の特徴である。2005年の時点で「782 貨物自動車」が第4位にランクされ、その後も2015年に第3位、2024年に第4位となっている。そのほか、「781 乗用自動車」が2015年と2024年に第5位、「784 自動車用部品」が2015年に第6位、2024年に第7位にランクされている。これは、2000年代以降、タイにおいて自動車産業が成長し、競争力を高めてきたことの証左である。

それに関連して最後にもうひとつ、直近のタイの輸出の特徴を指摘しておきたい。2024年の時点で第8位にラ

第1表 タイの輸出品目上位10品目(100万ドル、%)

| タイ輸出 | 1995年 | | | 2005年 | | | 2015年 | | | 2024年 | | |
|------|---------------|-------|-----|----------------|--------|-----|----------------|--------|-----|-------------------|--------|-----|
| | 品目 | 金額 | シェア | 品目 | 金額 | シェア | 品目 | 金額 | シェア | 品目 | 金額 | シェア |
| 1 | 752 自動データ処理機械 | 4,817 | 8.4 | 752 自動データ処理機械 | 12,086 | 9.4 | 752 自動データ処理機械 | 17,865 | 7.4 | 752 自動データ処理機械 | 29,557 | 8.4 |
| 2 | 776 熱電子管・半導体 | 3,391 | 5.9 | 776 熱電子管・半導体 | 8,518 | 6.6 | 776 熱電子管・半導体 | 13,742 | 5.7 | 776 熱電子管・半導体 | 28,402 | 8.1 |
| 3 | 759 事務用機器の部分品 | 2,728 | 4.7 | 764 通信機器 | 6,789 | 5.3 | 782 貨物自動車 | 10,216 | 4.2 | 764 通信機器 | 17,960 | 5.1 |
| 4 | 036 甲殻類・軟体動物 | 2,517 | 4.4 | 782 貨物自動車 | 4,194 | 3.3 | 764 通信機器 | 9,982 | 4.1 | 782 貨物自動車 | 13,262 | 3.8 |
| 5 | 231 天然ゴム | 2,464 | 4.3 | 759 事務用機器の部分品 | 3,885 | 3.0 | 781 乗用自動車 | 8,072 | 3.4 | 781 乗用自動車 | 11,563 | 3.3 |
| 6 | 042 米 | 1,938 | 3.4 | 231 天然ゴム | 3,514 | 2.7 | 784 自動車用部品 | 6,160 | 2.6 | 741 エアコン | 8,530 | 2.4 |
| 7 | 764 通信機器 | 1,712 | 3.0 | 741 エアコン | 2,826 | 2.2 | 741 エアコン | 5,709 | 2.4 | 784 自動車用部品 | 8,416 | 2.4 |
| 8 | 037 魚・甲殻類の調整品 | 1,532 | 2.7 | 334 石油製品 | 2,675 | 2.1 | 334 石油製品 | 5,509 | 2.3 | 625 タイヤ | 8,335 | 2.4 |
| 9 | 851 はき物 | 1,483 | 2.6 | 037 魚・甲殻類の調整品 | 2,409 | 1.9 | 231 天然ゴム | 5,356 | 2.2 | 897 貴金属細工・貴石製品 | 6,797 | 1.9 |
| 10 | 061 砂糖・はちみつ | 1,248 | 2.2 | 897 貴金属細工・貴石製品 | 2,339 | 1.8 | 897 貴金属細工・貴石製品 | 4,707 | 2.0 | 057 果実・ナット(生鮮・乾燥) | 6,633 | 1.9 |

| タイ輸入 | 1995年 | | | 2005年 | | | 2015年 | | | 2024年 | | |
|------|-----------------|-------|-----|-----------------|--------|------|----------------|--------|-----|----------------|--------|------|
| | 品目 | 金額 | シェア | 品目 | 金額 | シェア | 品目 | 金額 | シェア | 品目 | 金額 | シェア |
| 1 | 776 熱電子管・半導体 | 4,994 | 7.1 | 333 原油 | 16,899 | 14.3 | 333 原油 | 19,521 | 9.6 | 333 原油 | 33,495 | 10.9 |
| 2 | 784 自動車用部品 | 3,022 | 4.3 | 776 熱電子管・半導体 | 9,521 | 8.1 | 776 熱電子管・半導体 | 10,861 | 5.4 | 776 熱電子管・半導体 | 27,856 | 9.1 |
| 3 | 333 原油 | 2,852 | 4.0 | 759 事務用機器の部分品 | 3,743 | 3.2 | 764 通信機器 | 7,828 | 3.9 | 971 非貨幣用金 | 15,372 | 5.0 |
| 4 | 759 事務用機器の部分品 | 2,170 | 3.1 | 764 通信機器 | 3,070 | 2.6 | 971 非貨幣用金 | 7,232 | 3.6 | 764 通信機器 | 9,037 | 2.9 |
| 5 | 673 鉄鋼圧延製品(無被覆) | 2,051 | 2.9 | 784 自動車用部品 | 3,021 | 2.6 | 784 自動車用部品 | 5,464 | 2.7 | 752 自動データ処理機械 | 8,545 | 2.8 |
| 6 | 764 通信機器 | 1,979 | 2.8 | 772 回路開閉機器印刷回路 | 3,009 | 2.5 | 772 回路開閉機器印刷回路 | 5,416 | 2.7 | 343 天然ガス | 8,518 | 2.8 |
| 7 | 728 その他の産業用機械 | 1,921 | 2.7 | 778 その他の電気機器 | 2,408 | 2.0 | 699 各種の卑金属製品 | 4,950 | 2.4 | 772 回路開閉機器印刷回路 | 8,261 | 2.7 |
| 8 | 772 回路開閉機器印刷回路 | 1,756 | 2.5 | 672 鉄鋼インゴット・半製品 | 2,370 | 2.0 | 343 天然ガス | 4,672 | 2.3 | 778 その他の電気機器 | 6,481 | 2.1 |
| 9 | 334 石油製品 | 1,689 | 2.4 | 673 鉄鋼圧延製品(無被覆) | 2,092 | 1.8 | 778 その他の電気機器 | 4,303 | 2.1 | 699 各種の卑金属製品 | 6,367 | 2.1 |
| 10 | 781 乗用自動車 | 1,551 | 2.2 | 699 各種の卑金属製品 | 1,963 | 1.7 | 759 事務用機器の部分品 | 3,527 | 1.7 | 759 事務用機器の部分品 | 6,107 | 2.0 |

(資料) UNCTADstat から作成。

ンクされている「625 タイヤ」が近年、上位に登場してきたことである。これまでタイの輸出品目として、上位にランクされることが多かったのは「231 天然ゴム」であった。実際に、1995年には第5位、2005年には第6位、2015年には第9位にランクされていた。それが、2018年に順位が入れ替わり、2019年から「625 タイヤ」がタイの輸出品目のトップ10に入るようになった。もともと天然ゴムという競争力のある原材料を豊富に有するというを考えれば、タイにおいて、より付加価値の高いタイヤの生産を行うようになっても大きな驚きはない。もちろん、中国企業がタイでタイヤを生産し、それをアメリカ市場に輸出するという構図がはっきりしてくれば、米中貿易摩擦がそのきっかけのひとつとなった可能性が高いと判断できる。

他方、タイの輸入に関しては、2000年代をとおして「333 原油」が上位にランクされ、2004年から現時点まで輸入品目の第1位となっている。2024年の時点での輸入額は335億ドルで、その総輸入に占めるシェアは10.9%である。2015年に第8位、2024年に第6位にランクされた「343 天然ガス」を含め、エネルギー関連の品目がタイ輸入の重要な構成要素となっていることがわかる。

そして、タイ貿易に特徴的なのは、輸出品目のランキングと同様に、輸入品目のランキングにも「776 熱電子管・半導体」や「764 通信機器」、「752 自動データ処理機械」「772 回路開閉機器・印刷回路」「778 その他電気機器」「759 事務用機器の部分品」などのIT関連

製品を含む電子機器が上位に位置していることである。2024年の時点では、この6品目でタイの総輸入の21.6%を占める。とくに「776 熱電子管・半導体」は、タイの輸入品目として2000年代以降も、常に第1位から第3位にランクされる主要な品目である。2024年の輸入額を確認すると279億ドル、シェアが9.1%となっている。すでに述べたように、タイの2024年の輸出第2位は「776 熱電子管・半導体」であり、その輸出額は284億ドルであった。つまり、タイは「776 熱電子管・半導体」の輸出と輸入を同じ規模で行っているということである。

なぜ、このようなことになるのか。これについては、筆者らのこれまでの研究により、2000年代以降、IT関連製品の生産を中心に、東アジア域内では分業構造が顕著に高度化してきたことが明らかとなっている⁶。こうした分業を促した要因のひとつは、多数の部品を組み合わせるIT関連製品の製品特性であったが、タイもこの分業の一角、つまり部品生産の一部を担っていたということである。

最後にもうひとつ指摘しておきたいのは、「781 乗用自動車」についてである。「781 乗用自動車」は、1995年の輸入品目第10位にランクされている。しかし、これ以降、トップテンに登場することはなくなった。輸出ランキングのところでも触れたが、自動車はいまやタイの

⁶ 大泉・宮島(2023)、宮島・大泉(2018)を参照。

第2表 タイの貿易相手上位10か国・地域（10億ドル、%）

| タイ輸出 | 1995 | | 2005 | | 2015 | | 2024 | | | | | |
|------|--------|----------------|------------|---------|----------------|------------|---------|----------------|------------|---------|------|------|
| | 国名 | 輸出額 (10億ドル) | シェア (%) | 国名 | 輸出額 (10億ドル) | シェア (%) | 国名 | 輸出額 (10億ドル) | シェア (%) | | | |
| 1 | アメリカ | 10.1 | 17.9 | アメリカ | 17.0 | 15.5 | アメリカ | 24.1 | 11.2 | アメリカ | 55.1 | 18.3 |
| 2 | 日本 | 9.5 | 16.8 | 日本 | 15.0 | 13.6 | 中国 | 23.7 | 11.1 | 中国 | 35.2 | 11.7 |
| 3 | シンガポール | 7.9 | 14.0 | 中国 | 9.1 | 8.3 | 日本 | 20.1 | 9.4 | 日本 | 23.3 | 7.7 |
| 4 | 香港 | 2.9 | 5.2 | シンガポール | 7.5 | 6.8 | 香港 | 11.8 | 5.5 | マレーシア | 12.3 | 4.1 |
| 5 | オランダ | 1.8 | 3.2 | 香港 | 6.1 | 5.6 | マレーシア | 10.2 | 4.8 | オーストラリア | 12.3 | 4.1 |
| 6 | 中国 | 1.6 | 2.9 | マレーシア | 5.7 | 5.2 | オーストラリア | 9.8 | 4.6 | ベトナム | 11.8 | 3.9 |
| 7 | ドイツ | 1.6 | 2.9 | インドネシア | 4.0 | 3.6 | ベトナム | 8.9 | 4.2 | インド | 11.8 | 3.9 |
| 8 | イギリス | 1.6 | 2.9 | オーストラリア | 3.2 | 2.9 | シンガポール | 8.8 | 4.1 | 香港 | 10.8 | 3.6 |
| 9 | マレーシア | 1.6 | 2.8 | イギリス | 2.8 | 2.5 | インドネシア | 7.8 | 3.7 | シンガポール | 10.8 | 3.6 |
| 10 | 台湾 | 1.4 | 2.4 | オランダ | 2.7 | 2.5 | フィリピン | 6.0 | 2.8 | インドネシア | 9.5 | 3.1 |

| タイ輸入 | 1995 | | 2005 | | 2015 | | 2024 | | | | | |
|------|--------|----------------|------------|----------|----------------|------------|----------|----------------|------------|----------|------|------|
| | 国名 | 輸入額 (10億ドル) | シェア (%) | 国名 | 輸入額 (10億ドル) | シェア (%) | 国名 | 輸入額 (10億ドル) | シェア (%) | | | |
| 1 | 日本 | 21.6 | 30.5 | 日本 | 26.1 | 22.0 | 中国 | 41.1 | 20.3 | 中国 | 80.6 | 26.2 |
| 2 | アメリカ | 8.5 | 12.0 | 中国 | 11.2 | 9.4 | 日本 | 31.2 | 15.4 | 日本 | 28.7 | 9.3 |
| 3 | シンガポール | 4.2 | 5.9 | アメリカ | 8.7 | 7.4 | アメリカ | 14.0 | 6.9 | 台湾 | 20.7 | 6.7 |
| 4 | ドイツ | 3.7 | 5.3 | マレーシア | 8.1 | 6.8 | マレーシア | 11.9 | 5.9 | アメリカ | 19.8 | 6.4 |
| 5 | 台湾 | 3.4 | 4.8 | アラブ首長国連邦 | 5.7 | 4.8 | アラブ首長国連邦 | 8.2 | 4.0 | アラブ首長国連邦 | 17.4 | 5.6 |
| 6 | マレーシア | 3.2 | 4.6 | シンガポール | 5.4 | 4.6 | 台湾 | 7.5 | 3.7 | マレーシア | 13.8 | 4.5 |
| 7 | 韓国 | 2.5 | 3.5 | 台湾 | 4.5 | 3.8 | シンガポール | 7.2 | 3.5 | 韓国 | 9.3 | 3.0 |
| 8 | 中国 | 2.1 | 3.0 | サウジアラビア | 4.1 | 3.4 | 韓国 | 7.0 | 3.5 | ベトナム | 9.1 | 3.0 |
| 9 | フランス | 1.9 | 2.8 | 韓国 | 3.9 | 3.3 | インドネシア | 6.6 | 3.2 | インドネシア | 8.7 | 2.8 |
| 10 | イギリス | 1.5 | 2.1 | オーストラリア | 3.2 | 2.7 | ドイツ | 5.5 | 2.7 | シンガポール | 7.4 | 2.4 |

(注) ここでは、輸出相手先ランキングを作成する都合上、輸出相手先の輸入データではなく、タイ側の輸出データを用いている。
(資料) UNCTAD stat より作成。

主要輸出品目のひとつとなっている。これは、輸入から国内生産へ、そして国内生産から輸出へと構造転換してきたという意味で、まさに教科書に出てくる「雁行形態論」の典型的なパターンである。そのような観点から考えると、自動車はIT関連製品と並びタイの工業化、そして貿易の拡大を主導した主要な品目であると言える。

第2節 タイの主要貿易相手国

1. タイの輸出入相手国の変化

タイの貿易拡大は、主にどの国との貿易によって支えられてきたのか。ここでは、タイの主要貿易相手国として、とくに中国、日本、アメリカのポジションに注目しつつ確認しておこう。第2表は、1995年から2024年のタイの輸出入相手国のうち、金額が多い上位10か国・地域を10年ごとに整理したものである。

1995年のタイの輸出先として、もっとも金額が大きかったのはアメリカであった。輸出額は101億ドルで、全輸出に占める割合は17.9%であった。第2位は日本で輸出額が95億ドル、シェアが16.8%であった。その後、2000年代をとおして、2008年までアメリカ、日本のワンツー体制が続いた。中国は1995年には第6位(16億ドル、2.9%)であったが、2004年にアメリカ、日本に続き第3位へ、そして2009年に第2位、翌年2010年には第1位となった。2010年代の前半こそ、アメリカが中国と日本に続く第3位となることもあったが、2019年から2024年まではアメリカが第1位、中国が第2位、日本が第3位の順番は固定化されている。2024年時点でアメリカへの輸出額は551億ドルでシェアが18.3%、中国への輸出額は352億ド

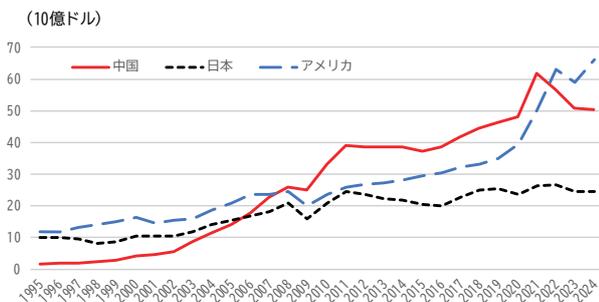
ルでシェアが11.7%、日本への輸出額は233億ドルでシェアが7.7%であった。

一方、輸入先を見ると、1995年の時点では日本が第1位であり、その輸入額は216億ドル、全輸入に占める割合は30.5%であった。第2位はアメリカで輸入額が85億ドル、シェアが12.0%であった。日本が第1位、アメリカが第2位という順位は、2003年まで続いた。1995年の時点では、第8位であった中国(21億ドル、3.0%)は、2001年には第3位に、2004年からは第2位となった。その後、2013年まで日本が第1位、中国が第2位の状況が続いたが、2014年に順位が入れ替わり、中国が第1位、日本が第2位となった。その順番は2024年まで続いている。その間、アメリカは2014年から2023年まで第3位にランクされていたが、2024年には台湾に抜かれ第4位となった。2024年時点で中国からの輸入額は806億ドルでシェアが26.2%、日本からの輸入額は287億ドルでシェアが9.3%、アメリカからの輸入額は198億ドルでシェアが6.4%であった。

2. タイの対中、対日、対米貿易の推移

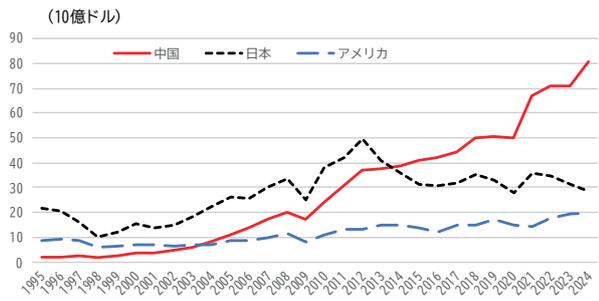
ここでタイの対中国、対日本、対アメリカの輸出入額の推移について確認しておこう。第2図と第3図はそれぞれタイの輸出額と輸入額の推移を示している。

まず指摘できることは、2000年代以降、タイの対中国貿易は、輸出、輸入ともに右肩上がりに増加しているということである。とくに2000年代と2020年代以降の輸出、および2010年代の前半と2020年代以降の輸入で増加が加速している。タイの中国への輸出額は2000年の47億



(資料) UNCTADstat より作成。

第2図 タイの中国、日本、アメリカへの輸出推移



(資料) UNCTADstat より作成。

第3図 タイの中国、日本、アメリカからの輸入推移

ドルから2024年には504億ドルへ増加した⁷。輸入額も同様に2000年の34億ドルから2024年の806億ドルへと急増した。2000年から2024年にタイの対中国貿易は輸出で11.5倍、輸入で23.9倍の伸びとなった。2000年代以降、タイの貿易が拡大した大きな要因のひとつが、中国との貿易が急速に増えたことであった。

対照的にタイの対日本貿易は、2000年代以降、微増もしくは横ばいの推移である。もっとも、前項で確認したように、もともとタイの貿易にとって日本のプレゼンスが低かったわけではない。2000年代には輸出、輸入ともに中国を上回り、とくに輸入では、2010年代の初頭まで第1位のポジションが続いていた。2000年のタイの日本への輸出額は106億ドル、日本からの輸入額は153億ドルであった。2024年には輸出額が247億ドル、輸入額が287億ドルとなり、それぞれ2.3倍、1.9倍に増加したものの、中国と比較するとその伸びは小さい。とくに、2010年代以降に日本からの輸入は減少し、その後、横ばい傾向となっている。

そして、タイの対アメリカ貿易については、輸出額が

⁷ 本項では、タイの中国への輸出額を「中国のタイからの輸入額」に置き換えて議論しているため、前項のタイの対中国輸出の金額とは一致していない（対日本、対アメリカの輸出額も同様）。なお、ここではタイ側からみた中国への輸出額と、中国側からみたタイからの輸入額に小さくない差があることも確認できる。

常に輸入額を上回っている状態である。また、輸入が微増で推移する一方で、輸出の増加のペースは輸入のそれを上回っている。とくに、2020年代に入りアメリカへの輸出が急増していることが確認できる。つまり、これは、タイがアメリカに対して貿易黒字を拡大させていることとなり、トランプ関税においてタイがアメリカ政府から高関税を課された要因のひとつと考えられる。2000年のタイのアメリカへの輸出額は164億ドル、アメリカからの輸入額は73億ドルであったが、2024年には輸出額が660億ドル、輸入額が198億ドルとなった。輸出額は4.0倍に、輸入額は2.7倍に増加し、輸出額の伸びが輸入額の伸びを上回っていることが確認できる。

第3節 タイの対中、対日、対米貿易構造の変化

1. タイの対中国貿易の構造変化

タイの貿易はどのように拡大してきたのか。ここではタイの対中国貿易の構造の変化に着目して分析を試みたい。分析枠組みとしては、宮島・大泉（2008、2018）で用いられた手法を援用する。具体的には、品目ごとに算出した貿易特化係数（産業内貿易指数）をもとに全品目を5つのカテゴリーに分類し、それぞれの貿易額（輸出額と輸入額の合計）を集計した上で、貿易総額に占める割合を導出した。

貿易特化係数は、以下の式により定義される。

$$\text{貿易特化係数} = (\text{タイの対中国輸出額} - \text{タイの対中国輸入額}) / (\text{タイの対中国輸出額} + \text{タイの対中国輸入額})$$

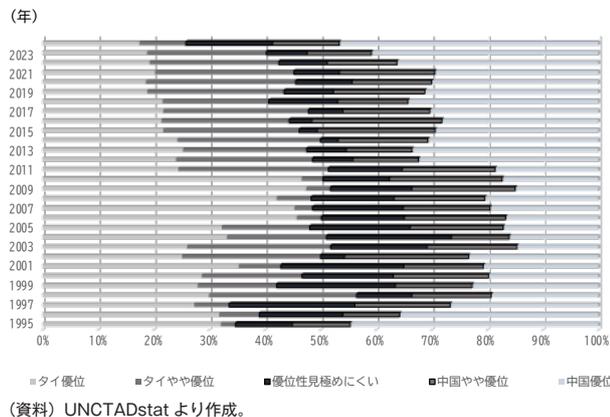
この係数は定義上、分母がゼロ（輸出輸入ともにゼロ）の場合を除き、その値が常に1から-1の範囲に収まる。たとえば、タイがある品目において完全に輸出に特化している場合、輸入額はゼロとなり、特化係数は1となる。反対に、完全に輸入に特化する場合には値は-1となり、この場合、中国側から見れば輸出特化を意味する。さらに、値が0付近に位置する場合は、輸出額と輸入額の規模が近接している、すなわちタイと中国の双方が同一品目を相互に貿易していることを示し、水平的な分業が展開されていると解釈できる。

この特化係数に基づき、タイと中国のすべての貿易品目を以下の5つのカテゴリーに分類する。

- ① タイが輸出に特化（タイ優位）した品目（0.6超）

- ② タイがやや輸出に特化（タイやや優位）した品目（0.2超～0.6以下）
- ③ 特化のない（優位性が見極めにくい）品目（-0.2以上～0.2以下）
- ④ 中国がやや輸出に特化（中国やや優位）した品目（-0.6以上～-0.2未満）
- ⑤ 中国が輸出に特化（中国優位）した品目（-0.6未満）

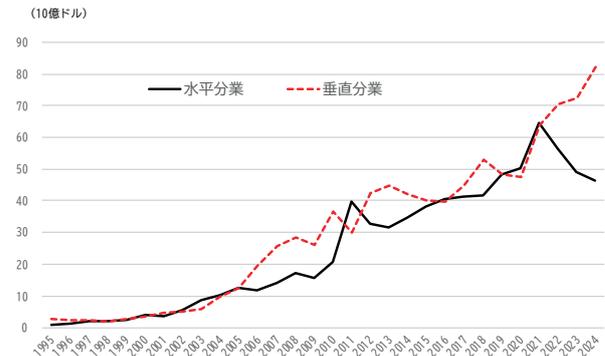
これらの分類ごとに貿易額を集計し、1995年から2024年までの各カテゴリーの割合の推移を示したのが、第4図である。両端に位置する①および⑤（色の薄い部分）は、それぞれタイと中国のどちらか一方が輸出に特化している品目群であり、垂直的な貿易（垂直分業）とみなすことができる。一方、中央に位置する②～④（色の濃い部分）は、双方が同一分野の品目を輸出入していることから、水平的な貿易（水平分業）を表しているとみることができる。



第4図 タイと中国の貿易構造の変化（5分類、%）

1995年から2024年までの推移をみると、水平分業の割合は1990年代後半以降、徐々に拡大し、2000年代後半には一旦縮小傾向となったものの、2010年代に入り再び拡大傾向を示している。データを確認すると、1995年における水平分業の割合は23.3%であったが、2000年には51.6%に倍増し、その後、2005年に50.6%、2015年に48.9%、そして、2024年には36.0%と推移した。これとは逆に、垂直分業の割合は、1995年に76.7%と全体の約4分の3を占めていたが、その後、その割合は縮小し、2005年に49.4%、2015年に51.1%、2024年には64.0%となった。

さらに、両者の貿易額の推移を示したのが第5図である。水平分業と垂直分業のいずれも顕著な増加傾向を示しているが、2020年代に入ると水平分業の貿易額は減少に転じていく。1995年には水平分業の貿易額が10億ドル、垂直分業の貿易額が30億ドルであったが、2024年



第5図 タイと中国の水平貿易と垂直貿易の推移

にはそれぞれ460億ドル、820億ドルに増加した。前者が53.8倍、後者が29.0倍に増加したことになる。2000年代以降、とくに水平分業に分類できる貿易額の伸びが著しい。これはここまで検討したように、IT関連製品を中心とした電気・電子産業におけるタイと中国の分業体制の深化を反映したものとみることができる。

一方、2000年代以降のタイと中国の貿易拡大においては、垂直分業に分類される貿易額の増加も軽視できない。これは、タイが中国の工業製品の市場としての重要性を増しているからだけでなく、タイがこの間、中国の工業化を一次産品や原材料の供給地として支える構図となってきたからである。これら水平と垂直、2つの分業の深化が相まって、2000年代以降のタイと中国の貿易は拡大してきたと言える。

2つの分業のなかで、具体的にはどのような品目が貿易されているのだろうか。そのことを確認するため、第3表には、2024年のタイと中国、日本、アメリカとの貿易について、5分類ごとに貿易額が大きい上位5品目を整理して並べた。

左の列に示されているのが、タイと中国の貿易についてである。垂直分業、すなわち特化係数が①0.6超（1番上の行）と⑤-0.6未満（1番下の行）のところからみよう。タイが対中国貿易で輸出に特化している品目は、「057 果実・ナット（生鮮・乾燥）」や「232 合成ゴム」「231 天然ゴム」「061 砂糖・はちみつ」などの農産品および農産加工品であることがわかる。他方、中国が輸出に特化する品目は「764 通信機器」「772 回路開閉機器・印刷回路」「776 その他の電気機器」といった電子機器、そして「699 各種の卑金属製品」や「893 プラスチック製品」といった工業製品である。ここからは、タイと中国との間で原材料と工業製品を貿易するという、典型的な垂直分業のパターンが見てとれる。

水平分業、すなわち特化係数が②0.2超0.6以下、③-0.2

第3表 タイと中国、日本、アメリカの貿易構造：2024年のカテゴリ別上位5品目（100万ドル、%）

| | 中国 | | | 日本 | | | アメリカ | | |
|------------------------|-------------------|-----------------|------------|-----------------|-----------------|------------|-------------------|-----------------|------------|
| | 品目 | 貿易額 (100万ドル) | シェア (%) | 品目 | 貿易額 (100万ドル) | シェア (%) | 品目 | 貿易額 (100万ドル) | シェア (%) |
| タイ優位（0.6超） | | | | | | | | | |
| 1 | 057 果実・ナット（生鮮・乾燥） | 6,213 | 4.8 | 764 通信機器 | 1,594 | 3.0 | 764 通信機器 | 9,446 | 11.1 |
| 2 | 232 合成ゴム | 2,724 | 2.1 | 017 肉類の調整品 | 1,518 | 2.9 | 752 自動データ処理機械 | 8,400 | 9.9 |
| 3 | 288 非鉄卑金属のくず | 2,041 | 1.6 | 752 自動データ処理機械 | 876 | 1.7 | 776 熱電子管・半導体 | 6,349 | 7.5 |
| 4 | 231 天然ゴム | 1,533 | 1.2 | 037 魚・甲殻類の調整品 | 614 | 1.2 | 625 タイヤ | 3,972 | 4.7 |
| 5 | 061 砂糖・はちみつ | 1,310 | 1.0 | 763 録音機器 | 606 | 1.1 | 778 その他の電気機器 | 2,635 | 3.1 |
| タイやや優位（0.2超0.6以下） | | | | | | | | | |
| 1 | 752 自動データ処理機械 | 7,948 | 6.2 | 781 乗用自動車 | 919 | 1.7 | 784 自動車用部品 | 1,975 | 2.3 |
| 2 | 746 玉軸受・ころ軸受 | 402 | 0.3 | 773 送配電用機器 | 692 | 1.3 | 081 飼料 | 1,085 | 1.3 |
| 3 | 036 甲殻類・軟体動物 | 383 | 0.3 | 741 エアコン | 594 | 1.1 | 772 回路開閉機器印刷回路 | 965 | 1.1 |
| 4 | 081 飼料 | 378 | 0.3 | 574 ポリエーテル重合体 | 495 | 0.9 | 743 空気ポンプ・圧縮機 | 756 | 0.9 |
| 5 | 098 その他の調整食料品 | 367 | 0.3 | 884 その他の光学機器 | 485 | 0.9 | 872 医療用機器 | 753 | 0.9 |
| 優位性見極めにくい（-0.2以上0.2以下） | | | | | | | | | |
| 1 | 776 熱電子管・半導体 | 10,241 | 8.0 | 743 空気ポンプ・圧縮機 | 859 | 1.6 | 874 測定・分析・制御機器 | 865 | 1.0 |
| 2 | 874 測定・分析・制御機器 | 1,205 | 0.9 | 893 プラスチック製品 | 849 | 1.6 | 699 各種の卑金属製品 | 570 | 0.7 |
| 3 | 575 その他のプラスチック | 1,158 | 0.9 | 716 回転式電気機械 | 422 | 0.8 | 773 送配電用機器 | 548 | 0.6 |
| 4 | 884 その他の光学機器 | 1,101 | 0.9 | 771 電力用機器 | 411 | 0.8 | 747 コック・弁 | 314 | 0.4 |
| 5 | 574 ポリエーテル重合体 | 1,067 | 0.8 | 629 その他のゴム製品 | 263 | 0.5 | 057 果実・ナット（生鮮・乾燥） | 224 | 0.3 |
| タイやや劣位（-0.6以上-0.2未満） | | | | | | | | | |
| 1 | 759 事務用機器の部分品 | 3,788 | 2.9 | 776 熱電子管・半導体 | 3,668 | 6.9 | 713 内燃機関 | 594 | 0.7 |
| 2 | 682 銅 | 2,036 | 1.6 | 784 自動車用部品 | 3,041 | 5.8 | 553 調整香料・化粧品 | 191 | 0.2 |
| 3 | 598 その他の化学工業生産品 | 1,606 | 1.2 | 772 回路開閉機器印刷回路 | 1,630 | 3.1 | 523 無機酸の金属塩 | 116 | 0.1 |
| 4 | 684 アルミニウム | 1,586 | 1.2 | 874 測定・分析・制御機器 | 1,449 | 2.7 | 551 精油・香料 | 83 | 0.1 |
| 5 | 716 回転式電気機械 | 1,103 | 0.9 | 713 内燃機関 | 1,045 | 2.0 | 334 石油製品 | 57 | 0.1 |
| タイ劣位（-0.6未満） | | | | | | | | | |
| 1 | 764 通信機器 | 6,375 | 5.0 | 778 その他の電気機器 | 1,678 | 3.2 | 333 原油 | 3,824 | 4.5 |
| 2 | 772 回路開閉機器印刷回路 | 5,023 | 3.9 | 673 鉄鋼圧延製品（無被覆） | 1,555 | 2.9 | 343 天然ガス | 1,142 | 1.3 |
| 3 | 699 各種の卑金属製品 | 3,437 | 2.7 | 682 銅 | 1,433 | 2.7 | 792 航空機・関連機器 | 1,010 | 1.2 |
| 4 | 778 その他の電気機器 | 3,159 | 2.5 | 675 合金鉄圧延製品 | 987 | 1.9 | 714 非電気式の原動機 | 986 | 1.2 |
| 5 | 893 プラスチック製品 | 1,975 | 1.5 | 971 非貨幣用金 | 784 | 1.5 | 251 パルプ・くず紙 | 553 | 0.7 |

(資料) UNCTADstat 作成。

以上0.2以下、④-0.6以上-0.2未満の3つのカテゴリについても確認しておこう。「②タイがやや輸出に特化した品目」の第1位は「752 自動データ処理機械」、「③特化のない品目」の第1位は「776 熱電子管・半導体」、「④中国がやや特化した品目」の第1位は「759 事務用機器の部分品」である。いずれもIT関連製品またはその部品である。これらのカテゴリの品目は、お互いに輸出もするし、輸入もする貿易品目を表すため、部品のやり取りを通じてIT関連製品などの完成品（最終製品）を生産するという、水平分業のパターンとなっていることが確認できる。

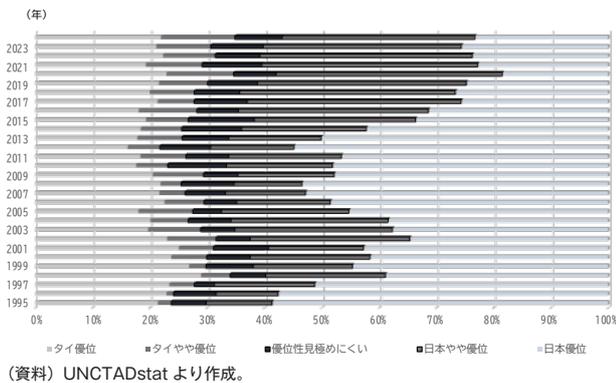
2. タイの対日本貿易の構造変化

前項の対中国貿易と同様の分析手法を用いて、タイの対日本貿易の構造変化についても確認しておこう。第6

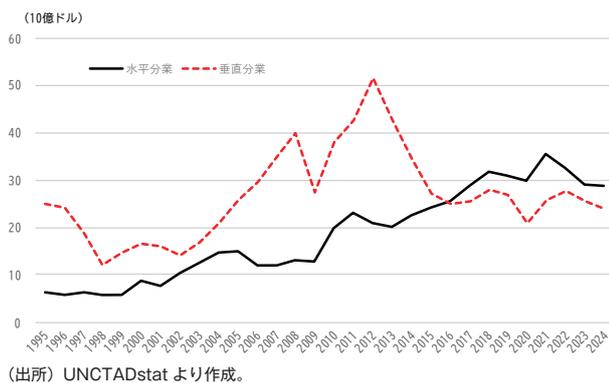
図には1995年から2024年の5つのカテゴリ別のシェアの変化を、第7図には水平分業と垂直分業に分類される貿易額の推移を示した。

タイと日本の貿易は、タイと中国の貿易とは違うパターンである。タイと日本の貿易は、1990年代、水平分業（第6図の真ん中の色の濃い部分）の割合が小さいところからスタートした。1995年の時点で水平分業（②+③+④）の割合は19.9%であった。このとき、前項の⑤に分類される日本優位の割合が58.7%と、タイと日本の貿易の過半は日本が輸出に特化した品目を貿易するという形になっていた。具体的には、「784 自動車用部品」と「776 熱電子管・半導体」「673 鉄鋼圧延製品（無被覆）」が、1995年の日本が輸出に特化した品目の第1位、第2位、第3位であった。

その後、2000年代に入ると水平分業の割合は拡大す



第6図 タイと日本の貿易構造の変化（5分類、%）



第7図 タイと日本の水平貿易と垂直貿易の推移

るものの、日本が優位の貿易構造が継続した。その後、2000年代後半には水平分業の割合は縮小に転じたが、2010年代後半には、その割合は急増した。2024年の時点では水平分業の割合が54.8%、垂直分業の割合が45.2%であった。

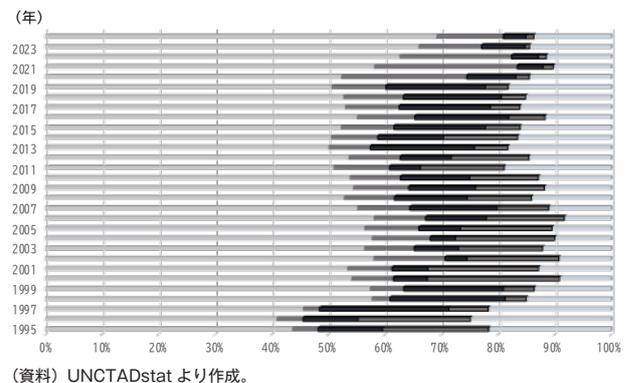
第7図からそれぞれの貿易額の推移を確認すると、水平分業に分類できる貿易額はゆるやかに増加の傾向となっている一方、垂直分業に分類できる貿易額は、アップダウンが激しく、2010年代をピークに減少に転じ、現在は横ばいの状態である。前掲第5図のタイと中国の水平分業と垂直分業の貿易額を示したグラフと比較すると違いが際立つ。2024年の時点では、水平分業に分類できる貿易額が290億ドル、垂直分業に分類できる貿易額が240億ドルである。

2024年時点の分類別貿易品目を前掲第3表から確認すると、「①タイが輸出に特化した品目」は第1位が「764 通信機器」、第2位が「017 肉類の調製品」、第3位が「752 自動データ処理機械」、第4位が「037 魚・甲殻類の調製品」である。IT関連製品や農水産加工品が上位に来ていることがわかる。一方、「⑤日本が輸出に特化した品目」は、第1位の「778 その他の電気機器」や第2位の「673 鉄鋼圧延製品（無被覆）」、第4位の「675 合金鉄圧延製品」など電子電気製品や鉄鋼などの分野の製品である。

また、水平分業に分類できる「②タイがやや輸出に特化した品目」の第1位は「乗用自動車」、「③特化のない品目」の第1位は「743 空気ポンプ・圧縮機」、「④日本がやや輸出に特化した品目」の第1位は「776 熱電子管・半導体」であった。タイと中国との分業の関係では、このカテゴリーに「776 熱電子管・半導体」以外のIT関連品目もランクされ、またその貿易額も大きかったが、タイと日本との貿易、分業の関係はそれとは異なる構造となっていることがわかる。

3. タイの対アメリカ貿易の構造変化

タイとアメリカとの貿易構造は、対中、対日貿易とは全く異なるものとなっている。前項までと同様に、第8図には、タイとアメリカの貿易における1995年から2024年までの5つのカテゴリー別のシェアの変化を、第9図には水平分業と垂直分業に分類される貿易額の推移を示した。



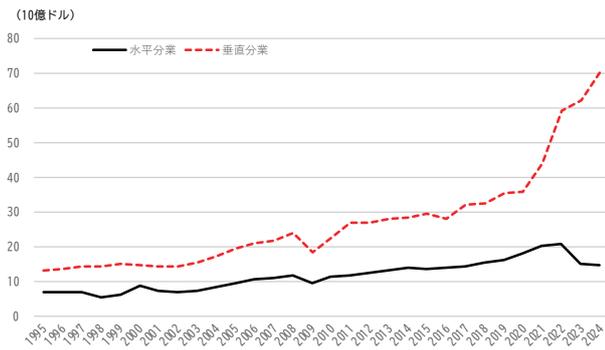
第8図 タイとアメリカの貿易構造の変化（5分類、%）

タイとアメリカの貿易は、2000年代以降、常にタイ優位の貿易構造となっている。とくに直近の2020年代以降はその傾向が強まっている。2024年の「①タイ優位」の割合は69.1%であり、「⑤アメリカ優位の割合」の13.6%と比較すると大きな差があることがわかる。また、水平分業に分類できる品目の割合（②+③+④）も17.3%と低く、対中国、対日本とは異なる貿易構造となっていることがわかる。つまり、タイとアメリカの間では、分業の関係が薄いことがここから確認される。第9図から水平分業と垂直分業に分類できる貿易額の推移を確認すると、対アメリカ貿易ではタイ優位の割合が大きい状態なので、垂直分業に分類できる貿易額が常に水平分業に分類できる貿易額を上回っている状態である。とくに2020年代以降には、垂直貿易に分類できる貿易額が急増していることもわかる。

2024年時点の具体的な貿易品目を、前掲第3表から5つのカテゴリー別に確認しておこう。「①タイが輸出に特

化した品目」の第1位は「764 通信機器」である。貿易金額は94億ドルと大きく、タイとアメリカの貿易全体の11.1%を占めている。そのほか第2位の「752 自動データ処理機械」、第3位の「熱電子管・半導体」とIT関連製品などの電子機器が上位を占める。また、先述した「625 タイヤ」もこのカテゴリーの第4位にランクされている。一方、「⑤アメリカが輸出に特化した品目」の第1位は「333 原油」である。貿易金額は38億ドルで、シェアは4.5%となっている。第2位の「343 天然ガス」を含め、アメリカはタイへのエネルギー供給国となっている。そして、第3位にはアメリカが競争力を持つ「792 航空機・関連機器」がランクされている。

水平分業に分類される貿易品目は、「②タイがやや輸出に特化した品目」の第1位が「784 自動車用部品」、「③特化のない品目」の第1位が「874 測定・分析・制御機器」、「④アメリカがやや輸出に特化した品目」の第1位が「713 内燃機関」であり、それぞれの貿易金額やシェアもあまり大きくない。タイの対中国、対日本貿易のところでもみたような分業の構造はここでは確認できない。



(資料) UNCTADstat より作成。

第9図 タイとアメリカの水平貿易と垂直貿易の推移

おわりに

最後に、米中貿易摩擦とトランプ関税のタイ貿易への影響について整理しておこう。第2節でみたように、2020年代以降のタイのアメリカへの輸出は急増している。また、同時期のタイの中国からの輸入も大きく増加している。これは、中国企業や中国に拠点のある外国企業（日本、韓国、台湾など）が拠点を東南アジアに移転し、そこからアメリカに輸出するという、いわゆる迂回輸出の動きとも見ることができよう。実際にアメリカ商務省は中国の太陽光発電メーカー5社が、関税を回避する目的でカンボジア、マレーシア、タイ、ベトナムを経由してアメリカに迂回輸出をしたと認定したこともあった⁸。た

⁸ JETRO「米商務省、中国の太陽光発電製品の迂回輸出認定を最終決定」『ビジネス短信』2023年8月24日。

だし、米中貿易摩擦は現在進行形の事象であるため、確定的なタイ貿易への影響を論じるためには、今後の動きを慎重にみていく必要があるだろう。

米中貿易摩擦が本格的に始まったのは2018年7月であった。そこから4度にわたりアメリカと中国の追加関税と報復関税の応酬があったが⁹、このときアメリカの中国からの輸入（中国のアメリカ輸出）は目に見える形では減少しなかった¹⁰。一見、アジアの貿易への影響は小さいと思われたが、2期目のトランプ政権が2025年4月2日に発表した、いわゆるトランプ関税（「相互」関税）は、中国だけではなく、日本を含むアジア諸国も広く対象となったため、各国の貿易に深刻な影響があるのではないかと懸念が広がった。

タイも例外ではなかったが、直近の2025年9月時点ではタイのアメリカ輸出は好調である¹¹。一方、2025年の中国のアメリカ輸出は前年比で減少が続いている¹²。ただし、中国はアメリカ以外にヨーロッパやアフリカ、そして東南アジアにおいて新たな市場を開拓すべく各種の取り組みをしており、その成果も見え始めている¹³。この「社会科学的な実験」がどのような結果をもたらすのか、今後も継続的に観察を行っていく必要があるだろう。

<参考文献>

- 大泉啓一郎・宮島良明(2023)「中国の対ASEAN貿易の新局面：2015年以降の変化を中心に」『アジア研究所紀要』(亜細亜大学アジア研究所)第49号。
- 木村福成(2025)「米中対立とトランプ2.0の東アジア生産ネットワークへの影響」『国際経済』(日本国際経済学会)第77巻。
- 宮島良明・大泉啓一郎(2008)『中国の台頭と東アジア域内貿易-World Trade Atlas(1996-2006)の分析から』東京大学社会科学研究所現代中国研究拠点研究シリーズ、No.1
- 宮島良明・大泉啓一郎(2018)「深化・分化する中国・ASEAN貿易」末廣昭・田島俊雄・丸川知雄編『中

⁹ 1期目のトランプ政権の中国への追加関税の経緯については、宮島(2024)を参照。

¹⁰ 2017年のアメリカの中国からの輸入額は5257億ドルであったが、バイデン政権が始まった2021年には5415億ドルと若干の増加となった。

¹¹ *Nikkei Asia*, October 27, 2025.

¹² *Nikkei Asai*, November 7, 2025.

¹³ *Nikkei Asia*, October 15, 2025.

国・新興国ネクサスー新たな世界経済循環』東京
大学出版会。

- 宮島良明 (2024) 「米中貿易摩擦の背景と原因に関する一考察」 亜細亜大学アジア研究所 『アジア研究シリーズ』 No. 113。

- “Chinese exporters race to find non-US markets at biggest trade fair,” *Nikkei Asia*, October 15, 2025.
- “Thai September exports jump 19% as pressure from US tariffs eases,” *Nikkei Asia*, October 27, 2025.
- “China exports decline unexpectedly for first time since February,” *Nikkei Asia*, November 7, 2025.
- JETRO 『ビジネス短信』 各号。